

SIJ

2019 SUMMER

特別号

Social and information Journal

25th

GUNMA UNIVERSITY
FACULTY of SOCIAL and INFORMATION STUDIES
from 1993 to 2018

Chronology

1993

1993.10 ■ 学部創設 社会情報学科 1 学科体制

1994.4 ■ 初の入学生を迎える

1996.2 ■ 日本社会情報学会
(JSIS,JASI) 発足

1997.9 ■ 社会情報学部棟竣工

1998.3 ■ 学部完成年度 初の卒業生を送り出す

1998.4 ■ 学部カリキュラム改革 1
大学院社会情報学研究科創設

1999.4 ■ 学部案内パンフレット製作委員会発足

2001.4 ■ 学部カリキュラム改革 2

2001.10 ■ 学部スポーツ大会開始

2003.10 ■ 10 周年記念式典

2004.4 ■ 国立大学法人化

2006.4 ■ 学部カリキュラム改革 3
情報行動学科、情報社会科学科の 2 学科制



- 2008.10 ■ 15周年記念式典
社会情報学研究センター創設
- 2009.6 ■ SIJ 創刊号発行
- 2010.4 ■ 学部カリキュラム改革
4科目改訂
- 2012.3 ■ 太陽光発電システム設置
- 2012.4 ■ JSIS,JASI 統合 社会情報学会 (SSI) 発足
- 2013.4 ■ 学部カリキュラム改革 5 キャリア教育科目導入
- 2013.10 ■ 20周年記念式典
企業との連携授業開始
- 2016.4 ■ 学部改組 2 学科から 1 学科 3 ディレクション制へ
- 2018.10 ■ 25周年記念式典



2019

to be continued.....

中村喜美郎

名誉教授

◆ 社会情報学部 of 歴史

昭和 40 年頃、全国の国立大学には「教養部」がありました。国が定めた「大学設置基準」に基づき、多くの大学で教養部を設置して教養教育を行っていたのです。しかし、大学全体のカリキュラムは変化し続ける社会に適合しなくなっていました。そして、このような問題を踏まえて 1991 年に大学設置基準が「大綱化」(緩和)されます。これに伴い、教養部に所属する教員を中心に新学部を設置し、大学全体の向上を目指すことになりました。群馬大学には社会科学系の学部がないということで、「社会科学部構想」や「情報社会学部構想」を経て、「社会情報学部」が創設されるに至ります。新学部設置において教員の異動や研究業績の審査など課題はありましたが、なんとか事無きを得て学部開設にこぎつけました。

◆ 3 つの課題

学内の問題をクリアしても、新しい学部ができるまでには様々な課題があります。社会情報学部には①「社会情報学部」という名前は一体何なのか？②早急に学部棟を建てる。③学部が完成年度(最初の卒業生を輩出した年)を迎えたとき大学院の修士課程を設置する。という 3 つの課題がありました。

1 つ目、国立大学で唯一の「社会情報学部」ですが、東京大学の新聞研究所というところが社会情報学研究所になったため、同じ国立大学として東京大学が提議した「社会情報学」と同じ概念でないと言われました。東京大学が改組する際、我々より先に「社会情報学」とはいったいどういう学問なのか、内閣法制局で検討され閣議決定を経ていたのです。私を含めて何人かの先生で東京大学に赴き、すり合わせを行いました。結果的に東京大学は研究所で、群大は学部で、その違いはあるが東京大学の考える「社会情報学」の概念と群馬大学の考える「社会情報学」の概念はほぼ同じでしょう、とお墨付きをもらいました。ホッとしました。文部省にも報告し、「社会情報学」という概念規定の課題はクリアすることができました。2 つ目、学部棟は旧教養部棟を使っていたのですが、第一期生が卒業する前(1997 年 9 月)に完成しました。3 つ目、修士課程については 1998 年 4 月に「大学院社会情報学研究科」が創設されました。

◆ 社会情報学部アイデンティティ

当時一番心配したことはアイデンティティの問題です。「社会情報学」のアイデンティティなど一般の人たちは知りもしません。一期生がどういう理解を持ってこの学部に来ていたかは、おそらく全員バラバラだったでしょう。当時は各地で教養部が廃止された影響で、様々な名前の学部が乱立しました。アイデンティティが不明な学部で一番とぼちちりを受けるのは学生と保護者です。早急に創り上げなければならないと思いました。私自身、「社会情報学部」という学問は「総合」「融合」「学際」というキーワードがアイデンティティの中心部分を成していると考えています。文理融合型の学部であることをアピールしてやってきた自負心があります。様々な分野の違った人たちが、それぞれの立場から話し合い刺激しあって新しいものを創り上げていく、そんな学部であると考えます。

社会情報学部ができて群馬大学が総合大学化しました。それまでは医学部、工学部、教育学部と、理系中心かつ専門職に就くための学部だけで、総合大学として機能していませんでした。本学部は、群馬県の国立大学を機能強化して、大学全体の教育・研究をより向上させる足掛けになったでしょう。

◆ ゼミでの出来事

私が研究している立法学という専門分野と、学生のやりたい情報系との接点を見つけるようなゼミをやりたいと言いました。一期生はちょうど「情報公開法」が議論されている頃で、特に地方の条例レベルで情報公開条例は多くできていませんでした。理想的な形の情報公開条例はできてなかったの、じゃあ我々でモデルの条例案を作ろうとなりました。ゼミ生3人といろいろな資料を集めてきては侃々諤々の議論をしました。ゼミで情報公開モデルを作り上げると、群馬県の自治体に配りました。こ

ういうモデルがあるから、各自治体で情報公開条例を作ってくださいとアピールしたのです。新聞記事にも取り上げられて全国的にも反響がありました。

あるとき埼玉県戸田市から連絡がありました。新しく当選した市長は公約として理想的な情報公開条例と個人情報保護条例を作ることを掲げていたのです。我々のやっていることが目に留まったようで、条例を作ることに助言してほしいと頼まれました。10回ほど戸田市に訪れました。学部の一期生が情報公開条例のモデルを、二期生が個人情報保護条例のモデルを手がけました。戸田市の職員の方とは今でも付き合いがあります。これこそまさに立法学という伝統的な学問と、新しい情報系学問との接点がある分野だということで、ゼミでは実践的なことをやりました。様々な表現をもって新しい情報との接点を考えながらゼミをやっていました。社会情報学部が文理融合型の学部だから出来たことだと思います。

◆ これから期待すること

同窓生の力、「同窓力」に期待しています。社会情報学部は25周年を迎えましたが、群馬大学の他学部と比べてまだ歴史は短いです。一期生も年齢的に仕事や家庭が忙しく、同窓生で集まって何かするというのが難しいと思います。しかしながら、学部の発展を考えたとき、同窓生に大学側と協力して学部を盛り上げてほしいです。

また、学部でゼミを開いていたときは新しい学問分野に触れて、やる気に満ち溢れた学生に引っ張られているように感じていました。社会情報学部は文理融合型ということで、個性豊かな学生が多く在籍しています。ひとつの事柄にも様々な角度から考えることができるでしょう。在学生には様々な授業や活動を通してあらゆることを経験し、それが自分の将来や学部の発展に繋がってほしいと思います。

Profile

中村 喜美郎 (なかむら きみお)

立法学を専門とし、群馬大学在職中に社会情報学部創設の立役者として尽力する。現在は社会情報学部同窓会の顧問を務める。昨年度、社会情報学・学部創設への貢献を讃えられ瑞宝中綬章を叙勲される。



25 周年 特別企画

同窓生に聞いてみた

社会情報学部
の卒業生にインタビュー
当時の受験時代・大学時代を振り返る

● 諏訪 博彦 ●

群馬県出身

1 期生

現在は大学教員として奈良先端
科学技術大学院大学に勤務



Q. 志望動機は？

●群馬大学に社会情報学部という新しい学部が誕生するということで志望しました。何ができるかわからないけれど、新しいものを作り出せる感覚がありました。当時はインターネットが普及し始める時期で、IT（＝情報技術）が社会を変えるといわれていた時期でした。インターネットをはじめとする情報技術により社会が変わるというわくわく感があり、国立大学で初めて社会情報学部を作った群馬大学に入学することにしました。

Q. 社会情報学部での思い出は？

●一番楽しかったのは、卒業論文を書いていた時期ですね。卒論の執筆自体はもちろん大変でしたが、203 室（コンピュータルームとは別に卒業生が自由にパソコンを使えた部屋）に入り浸って、毎日研究を進めていました。当時は 24 時間建物を使用できたので、夜遅くまでそれぞれの研究について議論したり、論文を書いたりしていました。今振り返るとつたない卒論ですが、精いっぱい書ききったという実感は良い思い出です。

Q. 社会情報学部で学んだ知識や考え方はどう生きているか？

●幅広い知識を学べたのは良かったですね。情報技術だけでは社会は成り立たないので、その技術の社会における価値や意味、意義を考えるベースを学べたと思います。一方で、プログラミングやデータ分析手法（当時は主に統計学）については、もっと勉強しておけばよかったと反省しています。社会における価値や意義を主張しても、実現方法を提示できなければ絵に書いた餅です。私の研究者としての基礎は学部で培われましたね。

● 片岡 雅人 ●

埼玉県出身

2 期生

現在は IT エンジニア / マネージャー
として IT ベンチャーに勤務



Q, 志望動機は？

●文系と理系の区別がなかったことです。また、人々の行動に影響を与える「情報」やその情報を運搬する箱である「メディア」について学べることで、他の大半の大学では学べないことが学べる学部であったからです。

Q, 社会情報学部での思い出は？

●研究室のコンピュータネットワーク構築をはじめ、多くのことを自由にやらせてもらえたことです。このように自分で1つのシステムを作り運用したことは苦労も多かったですが、それ以上にその成功体験が社会に出て役立っています。

Q, 社会情報学部で学んだ知識や考え方はどう生きているか？

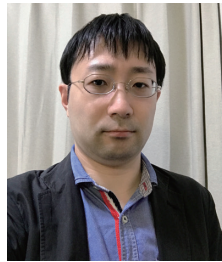
●変化の激しい今の時代、将来どういう知識が役立つかは誰にもわかりません。しかし、社会情報学部で文系・理系両方の様々な分野を広く学べたため、主体的に時代の変化に対応できていることです。

● 本山 賢 ●

熊本県出身

8 期生

現在は小売業を経営



Q, 志望動機は？

●幅広くさまざまなことを学びたかったことと、また浪人は避けたかったため、自らの学力と学際的な研究ができる学部を探した結果、群馬大学社会情報学部にとどり着きました。当時は、メディアリテラシーについて学びたかったのですが、入学後はそこまで学ばなかった気がします。九州を出て、遠い群馬で一人暮らしすることは不安もありましたが、自宅から通うことができる大学はなかったため、特に気にしませんでした。

Q, 社会情報学部での思い出は？

●いろいろな方々とたくさん話したなーというのが思い出です。1年目は学外に出ることが多かったため、群馬在住の社会人の方と。2年目は学部パンフレットを制作していたため、同期の誰よりも先生方とお話ししたと思います。サークルでは、他大学の学生と議論することが多かったため、毎月都内に出ていました。苦い思い出は、プログラム制作を失敗して、5分間に数百通のメールを自らの携帯電話に送ったことでしょうか。

Q, 社会情報学部で学んだ知識や考え方はどう生きているか？

●当時も今もですが、社会情報学部は自ら学ばない限り何も学べない学部です。振り返ると学生時代よりも現在のほうが論文をよく読んでおり、学部の講義から学んだことというのは、多くなかったように思います。しかし学内外でいろいろなプロジェクトに関わらせていただいたことで、「誰かと一緒に物事を進める方法」を学びました。また、マルチメディア実験室でデザイン制作ソフトに触れたことが、仕事や趣味に活かしています。

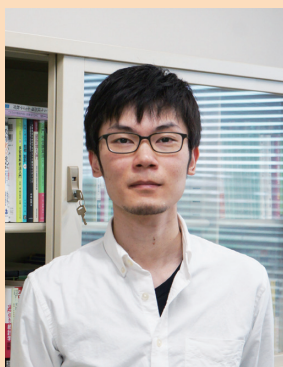
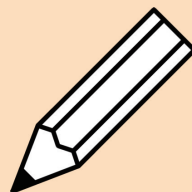
鳶島修治 先生

インタビュー

▶ 群馬大学に入学して

群馬大学には2002年に入学しました。県内出身で、どこの大学に行きたいかというよりは、群馬に残るか県外に出るかで進路を決めました。社会情報学部で4年間、社会情報学研究科（修士課程）で2年間を過ごしました。卒業論文や修士論文を書く中で、段々と研究が面白いと思うようになりました。その後は東北大学の大学院（博士課程）へ進学し、東北大学でしばらく働いたあと2016年12月に群馬大学に着任しました。

大学受験時は特にやりたいことがなく、教師になろうという気持ちもなかったので社会情報学部を志望しました。ところが、ゼミで指導教員に紹介された本がきっかけで「教育の格差」について興味を持つようになり、研究者の道へ進むことを決めました。学生時代は教職に就くつもりはなかったですが、不思議なことに現在は大学教員として働いています。



鳶島 修治

Shuji Tobishima

群馬大学社会情報学部助教

教育の格差を社会学の視点から
研究する教育社会学に力を注ぐ。

▶ 受験生に伝えたいこと

私自身、明確な目的はなかったですが社会情報学部に入って良かったと感じています。高校3年生の時点で将来の目標を無理矢理決める必要はないと思う（将来の目標が決まっている人は、それはそれで良い）ので、こうした様々な分野を学べる学部に進学するのも良い選択だと思います。また、群馬大学は県内で唯一の国立大学であり、文系の受験生が選べる進路のひとつとして、文理融合型の社会情報学部は必要な学部だと考えています。

社会情報学部では、色々なことを学んだり経験したりできるSIJや学部案内パンフレット制作委員会、データ解析プログラムやGFLといった特色ある活動に参加することができます。学生がこうした活動をすることで、教員との距離もより近くなっているように思います。冊子の作成や外部と連携した活動など、他の学部ではなかなか出来ないことに取り組んでいる社情の学生は、アクティブで素晴らしいと感じます。

SIJ 特別号：2019 年 7 月

制作・発行：群馬大学社会情報学部 SIJ 編集委員会

〔福井健一郎 / 三浦祐実 / 浦山あかり / 相良瑞希 / 高柳凜太郎 / 吉長花咲〕

顧問：伊藤賢一

協力：中村喜美郎 / 諏訪博彦 / 片岡雅人 / 本山賢 / 鳶島修治

印刷：上武印刷株式会社 © 群馬大学社会情報学部 SIJ 編集委員会

※本冊子の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転記・転載することを禁止します。

25th